

BB女優としてのジョディ・フォスター論

ホテル・ニューハンプシャー
THE HOTEL NEW HAMPSHIRE
1984年アメリカ映画
監督||トニー・リチャードソン
出演||ロブ・ロウ/ジョディ・フォスター/
ボー・ブリッジス/リサ・ベインズ/
ナスターシャ・キンスキー



一九八一年、アメリカ大統領のレーガンが狙撃されたとき、犯人がジョディ・フォスターのファンだったことで話題になりました。一九七六年に公開された映画で、ジョディが十四歳で少女娼婦の役を演じた『タクシー・ドライバー』（マーティン・スコセッシ監督）で、主役のロバート・デ・ニーロ扮する陰気で自意識過剰なタクシー運転手が、大統領候補を暗殺しようとする場面があったこともあり、映画がオタクに与える影響力の強さが云々されましたけれど、私が個人的に興味を抱いたのは、当時、日本の一部メディアで「ポルノ女優の熱狂的ファンが大統領を暗殺しようとした事件」として報道されたことです。

無理もないです。私は、ジョディ・フォスターとほぼ同年代ですが（ちょっとだけ年下）、私をはじめ彼女の名前を記憶したのは『白い家の少女』という映画でした。あ、いや、厳密にいうと、私はその映画を見ていません。親父が講読していた週刊誌に紹介記事が載ってしまって、それによると、早熟な十二歳くらいの少女がポルノ小説を一人で書いていて、ただ経験がないために、肝心な場面が書けない。それでマーティン・シーン演じる中年男性を誘惑するというストーリーでした。ジョディが、マーティン・シーンを前に服を脱いで全裸になるスタイル写真（た

だし、背中から映していますし、実際にはジョディの姉が吹き替えたとか）が話題になったように記憶しています。

ようやく性に目覚めようという餓鬼にとっては、かなり衝撃的でした。厄介な自意識が芽生える思春期において、同世代の女の子がマスメディアで活躍し、自分がまだ知らない「性」の世界を演じている。それは、ある種の興奮とともに、それ以上の反感をもたらすものだったように思います。

実際、ジョディは名子役として、多くの映画に出演していました。前出の『タクシー・ドライバー』以外にも、『ペーパームーン』（一九七四年）では、十二歳にして銀ラメの入ったセクシーなドレスを着て酒場の歌手を演じています。

すなわち、彼女はたんなる「かわいい」子役ではありませんでした。年齢にふさわしくない、妖艶な大人の色っぽさを表現できる異色の存在でした。

当然、彼女に続け、とばかり登場したのが、ブルック・シールズやダイアン・レインです。美人や肉感的な魅力からいえば、ジョディはどういブルッキューやダイアンの敵ではありませんでした。彼女はいわゆる美人タイプではありませんし、体つきも「肉感的」とは程遠いタイプです。

にもかかわらず、ハリウッドにおける成功度で言えば、ジョディはもはや、ゴシップ欄を賑わ

すだけの存在となったブルツキーや、B級アクション映画のヒロインがやつとこさのダイアン・レインには、とうてい手の届かない高みにまで上り詰めました。名門エール大学に進んだジョディを真似し、ブルツキーはプリンストン大学に進みました。結果的に、ジョディは大学を卒業後にぐんぐん『告発の行方』（一九八八年）や『羊たちの沈黙』（一九九一年）でキャリアアップに成功したのに対し、ブルツキーの場合は四年間の大学生活が女優としてのキャリアにおいて致命的な中絶となったのです。

私はジョディを、「妖艶な大人の色っぽさを表現できる」と書きました。それは、彼女自身が「妖艶で色っぽい」という意味ではありません。逆にいえば、「見た目が妖艶で色っぽくなくとも」じゅうぶんに「色っぽさは表現できる」ことを示しています。

ジョディの最大の、そして彼女を大人になってからも成功に導いた要素は何かというと、「声」だと私は思っています。

これはあまり言われないことですが、女優にとって「声」は、息長く活躍するためには大事な要素なんです。日本でも、熟年になってからも活躍している女優さんは、みな声がいい。たんに音として心地よいのではなく、幅広い表現が可能な声を持っているという意味です。

たとえば田中裕子さん。ふだんはか細い可愛らしい声でしゃべる人ですが、突然、きつと表情を引き締めて、はらわたまで響くようなドスの聞いた声を出せる人です。その使い分けが、天衣

無縫とでもいうしかない見事さなんです。

いまふうに言えばキャンギャル上がり、そして日本における巨乳ブームの鼻祖である、かたせ梨乃さんもそうですね。若いときの彼女は、やたらかんだかい声できゃあきゃあ騒がしい芝居に辟易したのですが、ある時期からは、愛嬌のある高い声もドスの聞いた低い声も、自由自在にこなせるようになった。彼女らが、四十を越えても活躍できる秘訣は、「自由自在にさまざまなニュアンスを表現できる声」を獲得したことが大きいんですね。

で、ジョディ・フォスター。

十四歳の少女娼婦を演じた『タクシー・ドライバー』で、ロバート・デ・ニーロと二人で朝食を食べるシーンがあります。なんとか彼女を更生させようというデ・ニーロは、必死になって「女の子は家にいるべきだ」と口説きますが、ジョディはバタートーストに大量の砂糖を振りかけてパクつきながら、「そんな時代遅れよ。これから、ウーマンリブの集会があるんだけど、いっしょにいつてみない？」と、ベテラン女優のような低い台詞回しで翻弄するんです。

甘いものが大好きな子供っぽさと、へんに大人びた可愛げのない声。そのアンバランスさが不思議な雰囲気醸しだしていました。

声というものは、鍛えてどうにかなるものではありません。声帯の厚さ、口蓋（上顎のえぐれ）の深さで、ほぼ決定されるものです。その点で、ジョディは恵まれていたといわざるを得ません。

とここまで述べたところで、やっと「金蹴り」です。

一九八四年製作の『ホテル・ニューハンプシャー』

ジョディが生意気な小娘を演じると、ほんとうに殴りたくなるくらい憎たらしいんです。お父さんがポー・ブリッジス。お母さん役のリサ・ペインズ。長男を演じるロブ・ロウ。みんな、涙が出そうになるくらい、優しく、親切で、我欲をまったく感じさせないいい人ばかりです。

そのなかでただ一人、ジョディ演じる長女だけが、無口ながらも自己主張が強く、何をいわれなくても動じない、いわゆるいやな小娘なんです。つっぱった娘というのは往々にして、寂しさをこわもてでごまかしているという設定が多いですけど、彼女には、いわゆるしおらしさがまったく感じられない。しかもその低い声が、ますます傲慢な印象に拍車をかける。

ごくたまに、兄貴が彼女の意向に背いた行動をとると、何も言わずに黙って金蹴りを浴びせる。とんでもない女です。

そんな娘は、同世代の男の子たちにとっては、なんとかいじめてやりたい存在でしかありません。口喧嘩ではとうていかなわない。そうなったら、最終手段はひとつしかありません。

三人の男の子が、森を散歩するジョディを三人がかりで襲撃します。性欲本能をむきだしにして襲いかかってくる男の子たち。しかしジョディは、ここでも動じない。まっさきに飛び掛っ

てきた男の子に対して、狙いすました金蹴り。

そこで場面は切り替わって、異変を聞いた兄貴のロブ・ロウが駆けつける。男の子たちはジョディを取り囲み、仰向けに地面に横たわっている彼女の脚だけが映っている。その太股は血にまみれてる。

多勢に無勢、とうとう強姦されてしまったんですね。しかも初体験が輪姦という、女性にとってはむごすぎる設定。

ただ、この映画の異様さは、そんな場面を淡々とカメラを固定しっぱなしで映し出していることです。アメリカの田舎じゃ、生意気な娘が輪姦されるなんて日常茶飯事なのさ、と言わんばかりの演出。実際、地面に横たわるジョディは、涙ひとつ流さず、あいかわらずのポーカーフェイスなんです。

泣きたい気持ちを必死にこらえているわけでもなく、ショックの大きさのあまり能面になってしまったわけでもない。ほんとうに、何事もなかったかのような演技。その後のストーリー展開においても、ジョディはなんの心理的後遺症もなく振る舞い、男どもはただただ畏敬の念を抱くしかない。やがてお母さんが病死すると、「今後は、私が家を仕切るわ」と宣言。男たちは一も二もなく従うしかない。こんな役柄、ジョディ以外には考えられないのは確かです。

その後のジョディ・フォスターは『告発の行方』で強姦され、『羊たちの沈黙』で殺人鬼と暗

い部屋に閉じ込められ、まさに男性の攻撃本能誘発女優ぶりを発揮しつつオスカーを獲得し、いまや押しも押されぬ大女優。近年、男性のパートナーなしにお母さんになったそうですが（人工受精でしょう、おそらく）、私なんぞには、うっかり結婚なんかしてしまったら、夫君の攻撃本能を誘発し、毎日のように暴力を振るわれかねない自分のキャラクターを熟知しているから、としか思えません。

ある意味で、ポスト・フェミニズム時代の模範的な女の生き方をまっしぐらに進んでいる彼女ですが、だからなんでしょうね、いまひとつ彼女が、女性たちからの支持が少ないのは。隙のない人間にいまひとつのめりこめないのは、男も女も同じです。隙がなさすぎる人間は、いわば鈍感ってことですから。賢い鈍感さくらいとっつきにくいものはないんです。